
 * * * * *
 * 第25回原子力安全問題ゼミ 1986年10月30日 *
 * ウィーン反原発国際会議の報告 *
 * 小出 裕章 *

I. はじめに

反原発国際会議 1986年9月24日～26日 於て ウィーン
 別添資料参照

Conference on Reactor Unsafety and Depart from Nuclear Power
 Anti Atom International 主催

同期間に同じウィーンで開かれた IAEA の閣僚級会議に対抗

その会議に参加すべきかどうかの議論。

インターナショナルということの意味。

II. 会議内容の紹介

- ◎ フォーラム1 (24日午前) : 原子炉の不安定性
 - フォーラム2 (24日午後) : 放射線と健康被害
 - ◎ フォーラム3 (25日午前) : 経済性問題
 - フォーラム4 (25日午後) : 原子力からの脱却法
 - ◎ フォーラム5 (26日午前) : 商業利用と軍事利用
 - フォーラム6 (26日午後) : 原子力国家の不法性
- : 小出が発表 ◎ : 参加 ○ : 不参加

会議自身はアカデミックというよりは、むしろ政治的・社会的な色彩の強いものであった。小出の講演 “Radioactive Contamination in Japan from the Chernobyl Accident” (別添の『公害研究』に掲載された「チェルノブイル原発事故の教訓」のうち、“3 事故による日本の汚染”の章と同じ内容) が、最もアカデミックなものの一つであった。

会議で話された内容の主なもの

1. チェルノブイル原発事故についての情報が充分でない。(Webb)
2. 軽水炉の圧力容器の照射脆化と破壊の危険性(Kromp, Tweer, Buler)
3. 人為ミスは避けられず、原発は人間的な技術と言えない。(Hirsh, Buler)
4. 原発のコスト計算には事故時の考慮がないし、それを考えないにしても、火力よりも高い。(Harding, Puiseux, Franke, Baumann)
5. 軍事利用と平和利用は区別がつかない。(Bidwai)
6. 各地の運動など

「原発に反対する者は学問のない者」(フランス)

65%以上の国民が原発反対(フランス)

WH社の原発を利用、六つの共和国がすべて原発推進(ユーゴ)

チェルノブイル事故以降デモをした。(ユーゴ)

“ハイ・テク”という言葉が魔術となっている。(西独)

西独ジーメンス社の原発を輸入。(ブラジル)

フランスこそが見習うべき国と言われている。(アルゼンチン)

情報が非公開。しかし、反対運動。そして弾圧。(モスクワ)

チェコ、スロバキア、ハンガリー

III. 土壌サンプリング、Zwentendorf 原発

土壌のサンプリング——6か所

ウィーン市内(シェーンブルン宮殿(南西)、ホテル中庭(北)、
ブラターステルン(東))

ツベンテンンドルフ原発敷地

バリ ボン・ヌフのたもと

グルノーブル

あらゆる物がすでに汚染している。

マロニエ、ドングリの実も汚染

Cs-137 1200pCi/kg, Cs-134 600pCi/kg

ヨーロッパの土は、日本に比べて数十倍から数百倍汚れている。

アエロフロートの機内食、ソ連のチョコレートも汚染

キエフから来た封筒も汚染

ツベンテンンドルフ原発の見学（9月27日）

69万キロワット、西独KWU社製

1978年に完成したまま、国民投票で運転しないことを決定。

チェルノブイル原発事故後は解体を決定。

『世界で一番安全な原発』

ドナウ河へ、廃水を流す計画だったが、放流許容濃度は 5×10^{-4} Ci/m³ とのこと

IV. おわりに

1. 汚染から身を守る手段がないこと。

会議でのWebb氏の発言。『推進派に対策を要求しなければ、逃げてしま
う』

洗っても落ちない汚染——野菜。

役に立たない活性炭浄水器。

持続する汚染——牛乳。

シベリアの広大な大地も、ポーランドの街の灯もすべて汚染され尽くしている。

2. 運動について

西独バイエルン州知事『原発に反対している奴らは、社会に反対してい
る』

IAEAが行った黙禱と、それを許したことを反省する人達。

日本山妙法寺のお坊さん

3. インターナショナルということ

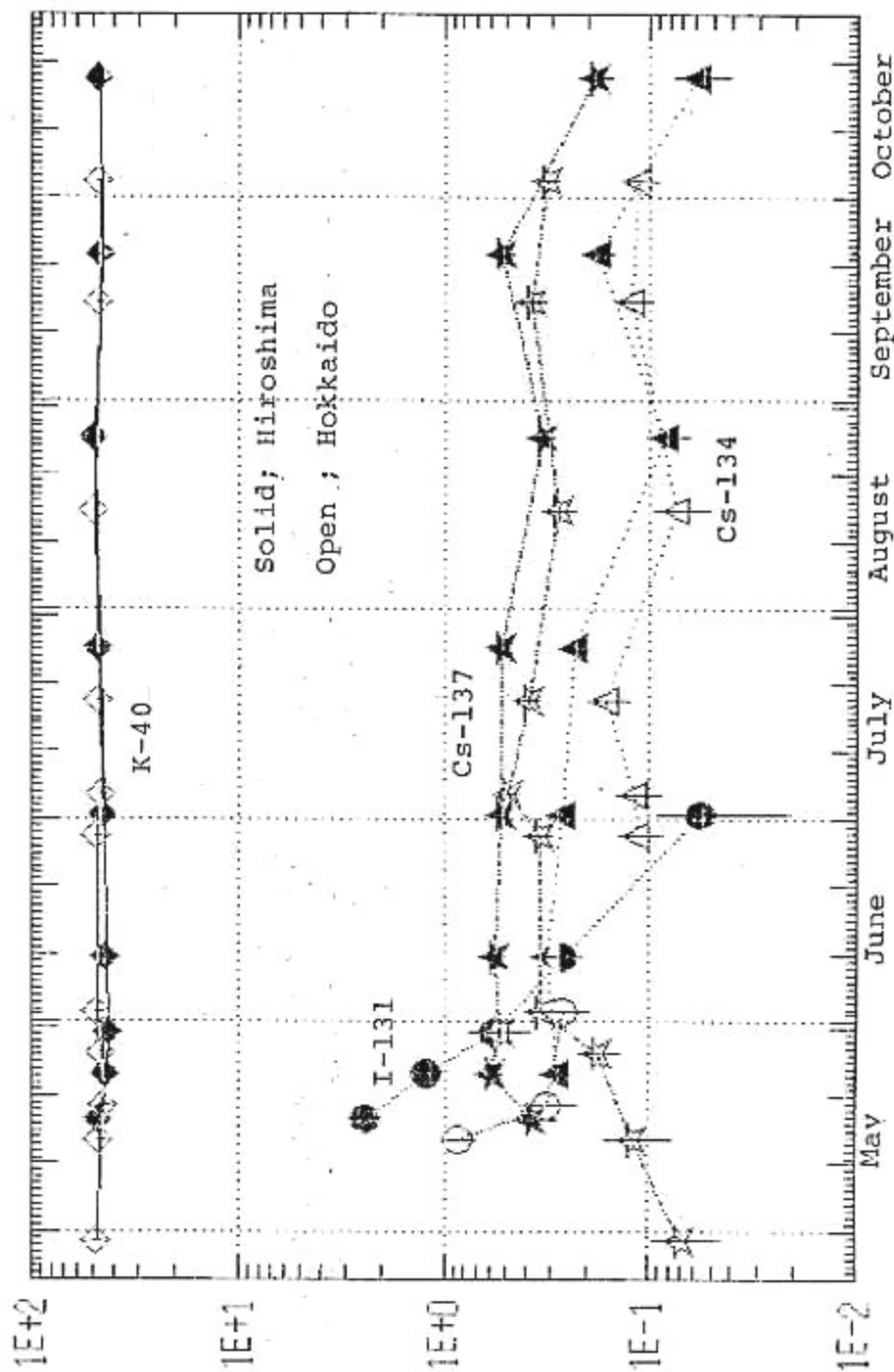
言葉の乗り越え方

どこにでも居る仲間

バリの人種 中曽根の低脳さ

いずれも同じ。そして、自分の場所での運動。

[Bq/l]



Radioactive Concentration in Milk